

## 第2 教育研究団体の意見・評価

### ○ 日本国語教育学会

(代表者 桑原 隆 会員数 約2,600人)

T E L 03-6801-5951

#### 1 前 文

新課程初年度ということで、第3問に非連続テキストも含む「実用文」の問題が加わって、全体の傾向が変わり、第1問や第2問では複数の文章の比較がなくなった一方、第4問や第5問では複数の文章の比較が出題されており、現代文分野と古典分野で出題傾向の違いが顕著になっている。

#### 2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

第1問 多くの情報を処理する必要が発生するもので、従来頻出のものと異なる論理構成の本文。従来と比較するといわゆる結論部がない点も特徴的。第2問にも関わるが、試験全体で選択肢が4つになったが、受験者にとっての時間的な負担の削減に貢献していた。

問1 前年度に比して訓読みから答える問題が減った点は気になる。

問2 導入として妥当。

問3 選択肢では「観光研究」の語が用いられるが、本問を解く上で、特に関連強い第7段落では「地域研究／観光研究」となっており、受験者に混乱を生む懸念がある。

問4 正答②のみ、他の選択肢と異なり2つ目の句点前の表現が「促し」になっている点は疑問。

問5 論理的文章を読む際に必要な能力を問える問題である。しかし、正答②「このように」以下の傍線部D・E「ともに踊る」双方にまたがる記述について、傍線部D「ともに踊る」では「他者のまなざしの対象」に関連する記述が薄く、「かつ」という表現で結んでよいのか疑問が残る。

問6 誤答④は誤答としてわかり易すぎる。本文の傾向が変わり、選択肢の作り方も変わってきていると思うが、本文での記載があまりにもないものや、選択肢の文章それ自体が曖昧な内容となってしまうのは、小手先で問題を解く能力を問う試験になってしまうと懸念する。

第2問 読者に想像を喚起する作品で、文学的文章の出題として非常に好感が持てる。

問1 本文の語りが「わたし」によってなされていることを受験者に把握させている点が良い。前年度に比し語彙の問題がなくなった点は気になる。

問2 「母に似たものだった」が含まれる箇所が示されることで「母」の記述を読み、そこから「わたし」の心情を考えるという思考の段階が示される問い方になっていた点が良かった。

問3 正答③で「祖母は素質が仕事につながっていない」とあるが、本文22行目から27行目で祖母につき、そうした記載は薄いのではないかと。複数箇所を読み比較する思考をして欲しいという作問意図を第1問、第2問に共通して感じるが、選択肢の記述の厳密性が従来よりも更に必要と考える。

問4 同じ語句の違いを考えさせる妥当な出題。

問5 文学的文章の出題で表現へ着目させる点は妥当。適当でないものを選ばせる出題は疑問。

問6 誤答②③が大きく外している点が気になるが、表現と心情の問題として妥当。

問7 妥当。正答④「自身の価値観が揺らぎ始めていること」に「わたし」の心境をまとめてよいかは気になる。こちらも一つのテキストの複数箇所を読み、思考をして欲しいという意図を

感じるが、この形の方が、複数テキストを提示する問題に比べ無理がなく良かったと思う。

第3問 短い時間で、連続型テキスト・非連続型テキストを処理しなければならない。難易度の調節はなされていたが、試験全体での調整は今後も必要。【文章】が提示されることで、実用的な文章に留まらず、文章における（特に書くことの）論理性という点に視野が及んでいるが、受験者への過度な負担になっている懸念もある。また、第3問全体で選択肢を読み、その適・不適を資料から確かめるといった解き方が多くなるが、それが実用的な文章に関する能力をはかる問題なのかは疑問。出題としても、今後些末な表現の違い等を見分けるだけになっていかないか心配。

問1 妥当。

問2 特に気になる箇所について指摘はなかった。

問3 【資料Ⅲ】の位置は疑問。(ii)で資料全体を読まねばならず、最初に全ての資料を示すレイアウトの方が望ましい。(ii)は加筆の方針、修正の方針で分けて出題した方が良い。

第4問 問題の難易度や処理への配慮が見られ、全体として良問。【文章Ⅱ】は『源氏物語』からの出題であり、難易度・分量ともに妥当。加持祈祷や「もののけ」など、我が国の文化に目を向けた点が「言語文化」の特徴を捉えており、新課程における共通テストの方向性が示されていた。

問1 基本的な知識を問う問題であり、妥当な出題であった。

問2 妥当。動作主や敬語の種類など、基本的な知識で答えが導き出せる。

問3 良問であり、作問の工夫や時間配分への配慮が随所に見られた。会話文が本文を読む手が必要となっており、選択肢にも紛れがなく、難易度も適切である。また、会話文の最終話者（生徒E）の発言が新課程の授業の方向性を示唆するものとなっていた。一方、小問が個別の文章の読解にとどまっており、複数テキストを比較する問いであればより望ましかった。

第5問 分量はやや多いものの、対句表現が多用されており明晰である。また、日本漢文の出題により、新課程における漢文教材の範囲を広げる方向性を示した点は評価できる。

問1 基本的な語彙の範疇から出題されており、妥当な設問となっている。現代語との関連を意識させる問いである。

問2 良問である。傍線部が後の読解の方向性を示しており、単に部分的な理解を問うのではなく、「論語」の文章を読み返すことを促す構成になっている。

問3 句法を中心に、文脈の中で語句の意味を考えさせる問題。選択肢に紛れがなく、妥当である。現代語との関連を意識させる問いである。

問4 やや難度は高いが、白文に返り点を付ける形から解放され、作問の意義や意図が感じられた。明治の文語文に頻出する「謂ひにして」を取り上げるなど、新課程の方向性を意識した出題となっている。

問5 新傾向の良問である。現代語の用法を問うことで、漢文と現代語のつながりを意識させるとともに、語の意味を丁寧に捉え、言語感覚を磨くことの重要性を示している。

問6 選択肢はやや長いが明晰で紛れがなく、妥当。時間配分に配慮した作問になっている。

### 3 総評・まとめ

平均点が昨年度より10点以上高くなったが、センター試験時代には平均点が130点を超える年も複数回あったことを考えると妥当な出題だった。全体としてよく考えられている出題と言える。

### 4 今後の共通テストへの要望

非連続テキストが入るので50ページ超えになっている。昨年までの形式と異なるので一概には言えないが、若干ページ数を抑えてほしい。また、第3問の持続的な出題のためにさらなる工夫を。